

技術の目利き



岡本 昌彦

大学は「知」の創出拠点であると同時に「人材」を育成する役割を担っていると
言えます。一方、民間企業には、「知」と「人材」を活用することにより、付加価値
の高い様々な製品やサービスを社会に提供する役割があります。

それぞれの役割や目的が異なる「学」と「企業」が結び付き、知の融合や人の交
流を行うことができれば、それぞれの役割を相互に高めあうことができるはずで
す。

現在のように、細分化から総合化へのパラダイム・シフトが急速に進展している
時代では、それぞれが単独で研究成果をあげることは難しくなっています。い
ち早く成果に結びつけるには、相互の連携を推進していくことが不可欠になり
ます。

連携を進める上で、重要な点は、どのような技術が何処にあるのか（誰が持っ
ているのか）を正しく認識することでしょう。本来、その企業にとってイノベー
ションにつながる技術であっても、その真価が認識されなければ、知の融合につな
がることはありません。

そこで必要とされるのは、「技術の目利き」のできる人材です。「技術の目利き」
とは、他者の開発した技術を理解して、その技術を正しく評価できる能力のこと
です。

ご存知の方も多いと思いますが、外部技術情報が如何にして組織内にもたらされ
るかの古典的な研究として、MITのThomas J. Allenによる「コミュニケーション
研究（1977）」が有名です。Allenによれば、高パフォーマンスの研究者集団内
には、集団内の誰ともなんらかの形で接触しているスター的な人材がいること、そ
のスターは外部情報との接触回数が他の同僚と比べて格段に多いことが特徴との
ことです。Allenは、このスター的な人材を Gatekeeper と名付けています。

通常、各組織は固有な考え方や文化、風土（社風）、用語などを持ち、その違い
がコミュニケーション・ギャップとなり、また、semantic noise（意味上の雑音）
となって解釈ミスを引き起こすとされています。Gatekeeperは、得られた外部情
報を semantic noise に感わされることなく選別し、有用な外部情報を組織内の研
究者に分かりやすく翻訳して伝える働きをしていると考えられています。組織の研
究者の多くは、Gatekeeperを介した翻訳のプロセスを経て、外部の最新技術情報
を応用可能な形で獲得しているのです。

ここで言う Gatekeeper の機能は、一種の「技術の目利き」であると考えられ
ます。各組織に Gatekeeper の機能を果たせる人材が多く存在して、その役割を達成
することができれば、連携の成果が次々と生みだされるはずで

す。これからの研究者には、企業、アカデミアを問わず、自らの研究開発能力に加
えて、Gatekeeperとしての能力がますます必要となるでしょう。

近畿支部には150名になんなんとする参与・幹事の先生方がおられます。また、
支部行事などにはシニアの先生方も多く参加され、活発に活動されています。こ
れら先生方は豊富な知的なストックを持っておられますし、「技術の目利き」に
長けておられる方もたくさんおられます。これを利用しない手はありません。特
に、若手の（企業の）研究者の方々は、このような恵まれた環境を十二分に活用
して、情報交換の場を越えて、自らの Gatekeeper としての能力開発に大いに利用
すべきです。近畿分析技術研究懇話会も、そのようなお手伝いのできる場として発
展していかなければならないと考えています。

〔Masahiko OKAMOTO, 住友化学株式会社, 日本分析化学会近畿支部常任幹事〕